

## ロシア科學アカデミー東洋寫本研究所周と

## 『東洋の文獻遺産』誌など

高田時雄

## はじめに

ヨーロッパからアジアにまたがる廣大な地域を占めるロシアでは、その版圖にのうちにアジア系諸民族を多數抱え込んでいることもあり、昔からアジア研究がすこぶる盛んである(1)。しかし如何せん、その研究成果がロシア語という、少なくとも國際的にはややマイナーな言語で發表されるために、ロシア以外の國々ではあまりよく知られないことは残念である。

小文ではロシア東洋學の傳統を受けつぐ科學アカデミー東洋寫本研究 所(2)(Институт восточных рукописей Российской академии наук, 略稱: ИВР РАН)と近年におけるその出版活動、とくに同所の機關誌である『東洋の文獻遺産』等の刊行物について簡単な紹介を行いたい。

## アジア博物館

ロシア科學アカデミーは早く一七二四年にピョートル大帝によって構想され、ペテルブルグ科學アカデミーとしてスタートした。そ

の會員はほとんど隣國ドイツをはじめとするヨーロッパ各國から招聘された外國人學者であったが、その中には中國語の文法をヨーロッパで最初に印刷刊行したバイエル(Gottlieb Siegfried Bayer, 1694-1738)のような人物があり、やや遅れては一九世紀前半のヨーロッパ東洋學をリードしたクラブローテ(Julius Heinrich Klaproth, 1783-1836)も一時このアカデミーに籍を置いたことはよく知られている。

アカデミーの中に東洋學に特化した施設が置かれたのは一八一八年のことで、これはアジア博物館(Азиатский музей)と命名された。アジア諸民族の文物や圖書を収集保管するとともに、それら进行研究することがこの施設のミッションであった。ロシアの東洋學はここを中心として著しい發展を遂げ、様々な輝かしい成果が産み出された。やがてサントク・ペテルブルグは世界東洋學の中心の一つとなったのである。ラードロフ(Василий Васильевич Радлов, 1837-1918)やオルデンブルグ(Сергей Фёдорович Ольденбург, 1863-1934)をはじめとする巨匠や、日本にも馴染みの深いアレクセーエフ(Василий Михайлович Алексеев, 1881-1951)、ローゼン

ベルグ (Оттон Оттонович Розенберг, 1888-1919)、『エリセーエフ (Сергей Григорьевич Енисеев, 1889-1975)』、ノムラート (Николай Иосифович Копрал, 1891-1970)、『ニコムスキー (Николай Александрович Невский, 1892-1937)』、シターツキー (Юлиан Константинович Шуккин, 1897-1938) となつた學者たちの名は、多かれ少なかれこのアジア博物館と密接な繋がりをもっている。

帝政時代のアジア博物館は『アジア雜纂』(Melanges asiatiques) という強力な機關誌をもつていた<sup>(3)</sup>。一八四九年から一八九四年にかけて全一〇集が世に送り出されたこの雜誌は、フランス語をはじめとする西ヨーロッパの言語を用いていたことも、その影響力を高めた大きな要因である。

アジア博物館は十月革命の後にも引き続きレニングラードに存在したが、一九三〇年に至つてソビエト連邦科學アカデミー東洋學研究所 (Институт востоковедения, ИВАН) として改組された。次いで第二次大戦最中の一九四三年、レニングラードから移つた研究者たちによつてモスクワ集團が組織され、戦後の一九五〇年になると東洋學研究所本體がモスクワに移され、レニングラードの研究所はその分所ということになった<sup>(4)</sup>。その後、東洋學研究所は一九六〇年からアジア諸民族研究所と改稱し、その後六八年にはまた舊稱に復した。ソビエトの崩壊後にも、ソ連科學アカデミーがロシア科學アカデミーに變つただけで、モスクワの東洋學研究所の分所としての位置づけに變更は見られなかった。しかし帝政時代から蓄積されたアジア諸言語の膨大な寫本及び文獻群はモスクワに移されることなく、一貫してこの分所に保存されてきた。

一九六〇年にモスクワで國際東洋學者會議が開催され、長いあい

だ西側世界との交流が途絶えていたソ連の東洋學界も世界の舞臺へと徐々に復歸し始める。レニングラードに大量の敦煌寫本が保存されていることが知られたのも、この國際東洋學者會議のエクスカージョンの折であった。それ以降、世界の敦煌學者のレニングラード詣でが始まつたりする中で、この研究所が敦煌寫本にとどまらず實はアジア古文獻の一大寶庫であることが今更ながら再認識されるのである。

このように、この研究所の本領は、豊富な所藏資料にもとづくアジア諸國の寫本、古文獻の文獻學的研究にあり、モスクワの研究所がややもすれば現代の政治や經濟などを扱ふのと一線を劃した性格を持つていたことを忘れるべきではない。「古典東洋學のペテルブルグ＝レニングラード的傳統」(Традиция петербургско-ленинградского классического востоковедения)<sup>(5)</sup> などという言い方が強調されるのも故なしとしないのである。

#### 東洋寫本研究所

二〇〇七年六月一九日、東洋學研究所サント・ペテルブルグ支所は、長年の悲願であつたモスクワからの分離を果たし、ロシア科學アカデミー東洋寫本研究所という獨立の研究所となつた。獨立に際して、所内には何とかして由緒ある名稱「アジア博物館」を復活させたいという希望があつたというが、これは法律上の制約があつて實現が叶わなかつた。しかし本來の文獻研究をミッションとする獨立の研究所が再びロシアに誕生したことの意義は大きなものがあるといふべきであらう。

かつてサント・ペテルブルグのこの研究所を訪れた人は、ネヴ

ア河に面したひととき印象的な美しい建物が否応なく記憶に留められていることであろう。この宮殿河岸通り (Дворцовая набережная) — 八番地の新ミハイロフスキー宮殿 (Ново-Михайловский дворец) は、もともとから研究所の建物だったのではない。ここに選ったのは第二次大戦後の一九四九年である。しかしその華麗にして優美な建築は恰もロシア東洋學の重厚な傳統を象徴するかのようでもある。この建物の中には現在、アラビア語、ペルシヤ語、チュルク語、アルメニア語、サンスクリット、チベット語、モンゴル語、満州語、中國語、日本語、朝鮮語など、全部で六五種類の言語で書かれた寫本が十萬點以上保存されているという。それだけでも垂涎の的と言ってよいが、そればかりでなく一九世紀末以來、ロシアの探險隊によって中央アジアや敦煌吐魯番からもたらされたサンスクリット、コータン・サカ語、トハラ語、ウイグル語、チベット語、西夏語などの出土文獻がとりわけ貴重な研究資料として世界の注目を集めていることは、誰しも知るところであろう(6)。

さて東洋寫本研究所の研究部門であるが、以下のように區分される。

古代東方研究部門

中央アジア・南アジア研究部門

極東研究部門

寫本及び文書部門

中東及び近東研究部門

圖書館

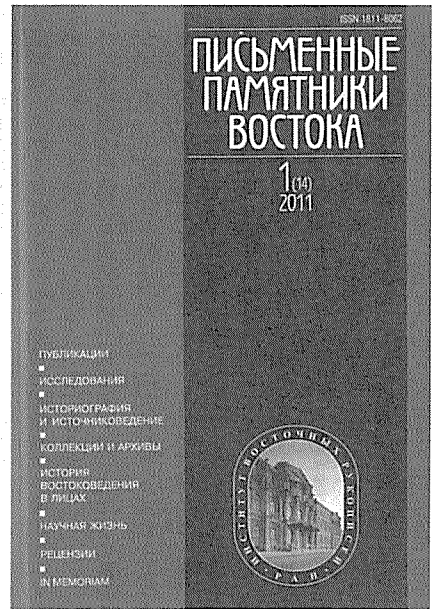
日本の研究者とも随分交流のあった敦煌學のメンシコフ (Лев Николаевич Меньшиков) 氏やチュグエフスキー (Леонид Иванович-

вич Чугуевский) 氏は残念ながら鬼籍に入ったが、西夏語のクイチャノフ (Евгений Иванович Кычанов) 先生や中央アジア諸語のヴォロビョヴァ・ディエシヤトフスカヤ (Маргарита Исидовна Воро-бьева-Дестовская) 女史はいまなお研究活動に餘念がなく、チュルク文獻學のクリヤシュネトルヌイ (Сергей Григорьевич Крышто-пный)、ソグド語のリフシツ (Брадимир Аронович Лившиц) とした老教授もなお健在である(7)。中國學のポボヰア (Ирина Федо-ровна Попова) 女史が二期目の所長を勤めているが、現在のスタッフ數は全體で一七七名、そのうち七六名が研究員である。

アジア博物館の時代から二〇〇年近く、この研究所が一貫してアジア古寫本、古文獻の研究を活動の中心に据えてきたことは上に何度も觸れた。ではその研究成果はどのような形で公開されているであろうか。

#### 『東洋の文獻遺産』 雑誌

現在この研究所の定期刊行物のうちで中核的地位を占めているのは『東洋の文獻遺産』(Исследования памятники Востока) 誌である。二〇〇四年に創刊され、年二冊のペースで、現在までに一四冊が刊行されている。ただこの雑誌は全く新たに創刊されたものではない。二〇〇四年の創刊號巻頭に掲載された編集部による「前書」に明示されているように、それは會てソ連時代に年刊(эжегодник)として出されていた同名の出版物を引き繼いだものである。背中の部分が茶色で、表紙がオレンジ色、B5版より少し大きめの、ペーパーバックではなく硬い表紙のついたシリーズを御記憶の方も多いと思う。こちらは創刊が一九六八年、もっぱらロシア所藏の東洋語



『東洋の文獻遺産』

文獻を紹介する刊行物として貴重な存在であったが、一九七八／七九年號の一冊を最期に刊行がストップしていた。ここに取り上げる『東洋の文獻遺産』は、前誌の傳統を受け継ぎながら、装いを新たに再出發したものである。卷號も新しく1から始まっているし、装本も落ち着いたブルーを基調とする瀟洒なデザインのパーパーバックになった。ようやく雑誌らしくなったともいえよう(圖は最新の第一四號の表紙)。サイズは二三×一六・五cmだから、A5版とB5版の中間の大きさである。每號大體二五〇／三〇〇頁で、資料公刊(публикации)、歴史と資料學(историография и истинно-ковенение)、研究(исследования)、東洋學者列傳(история востоковедения в лицах)、コレクションとアーカイブ(коллекции и архивы)、修復と保存(реставрация и хранение)、研究動態(науч-

ная жизнь)、書評(рецензии)のような專欄に分けられている。號によっては專欄の有無や順序に若干の變動があるが、一貫して資料公刊の欄が巻頭に置かれてあるのを見ると、この雑誌の目指すところがおおよそ理解できる。東洋學者列傳の欄名はこんなふうに譯してみたが、直譯ならむしろ「人物を通して見た東洋學研究史」とでもなるだろうか。要するにロシアの東洋學者たちのネクロロジーである。亡くなった同僚の一人一人の業績を稱え、思い出を語るあたりは、すこぶるロシア的であるように筆者には思える。

収録論文の扱う範圍は、極東から中央アジア及び西アジア、さらにはアフリカまで擴がっているので、個々の研究者にとって必ずしも目的の論文が每號多數載るわけではないと思われるが、専攻の如何を問わず、どの號にも少なくとも一つ二つは興味を引く文章が掲載されているように思う。東洋寫本研究所のホームページ(8)には各號の目次とアブストラクトが掲載されているので、ここではすべて省略することにした。

目次はロシア文と英文の二言語が用意されているし、ロシア文の論文には英文サマリーが付き、反対に英文の論考にはロシア文のサマリーが付けられている。しかし多くの論文、というよりほとんどの論文がロシア文である。これは現状ではやむを得ないとしても、編集部では今後外國學者の英文による論考を増加させていきたい希望を持っていると聞いた。そのために數年前から編集委員會に二名の外國學者を加えたが、今のところ目立って急速な國際化は見られないようだ。使用言語については、今後さらなる工夫と努力が待たれる。

今ひとつの問題点としてはディストリビューションの問題があ

る。かつてソ連時代には主要な雑誌は交換ベースでレギュラーに寄贈されてきていたものが、ソ連崩壊後多くの雑誌が入って来なくなつた。これにはロシアの郵便事情と国際郵便料金が大きな阻害要因になってゐるらしい。したがって現在日本國內にはこの雑誌のバックナンバー全部を所蔵する図書館は非常に少ない。何か良い方法を考へて、継続的な購讀が可能になればと思う。郵便に問題があるとすれば、電子版ということも考えられないではない。国際化の推進のためには先ずディストリビューションの問題を眞剣に考える必要があるように思われる。

この研究所の重要な刊行物にはまた『東洋文獻遺産』叢書 (Памятки письменности Востока) がある。日本語にすれば『東洋の文獻遺産』雑誌とほとんど同じになつてしまふこのシリーズは一九六五年の刊行開始だから、あと数年で五〇年の節目を迎える。ロシアでも最も權威のある出版物と目されており、終始一貫同じ黒表紙の装幀で我々にも馴染み深い。こちらは既刊分が現在すでに一三〇點を越えた。不定期ではあるが、毎年着實に數冊ずつのペースで出版されており、最近では鮮明なフックシミールの CD-ROM が附いていたりする。もちろん歓迎すべき事柄ではあるが、ビューワーの動作が将来的にも保證されるかは現時点では何とも言えない。

### その他

その他の関連する雑誌について説明すると、ソ連崩壊後の一九九五年から研究所の支援を受けて英文で刊行された雑誌に『東洋寫本』(Manuscripta Orientalia) 誌があつたことは記憶に新しい。英

文であるために國外でも相當に流布し、かなりの影響力があつたと記憶する。この雑誌は現在でもクンストカメラ (Кунсткамера) の後援によつて刊行されているが、二〇〇三年以降、東洋寫本研究所とは全く關係がないということである。内情は我々には窺い知れぬ部分があるのは致し方ないが、かつてはこの研究所の刊行物と言つてよいような存在であつた。

『東洋の國と人々』(Страны и народы Востока) 誌は一九五九年創刊で、古い傳統を有する。毎號たいていは極東とか、中央アジア、インドなどの地域別に特輯を組むか、あるいは地理學、民族學といった特定の主題を掲げて、まとまつたテーマの論文を掲載してきた。この雑誌も二〇一〇年の第三三號から東洋寫本研究所が直接關與することになり、ロシア地理學協會東方委員會 (Восточная комиссия Русского географического общества) との共同出版という形式で出版されるようになった。その第三三號は「歴史・民族・文化」(История, Этнография, Культура) の標題下に、西アフリカからアラビア、モンゴル、中國、日本、サハリンなどの地域にわたる一二篇の論文を掲載している。

所外の刊行物としてはまた『ペテルブルグ東方學通報』(Петербургское востоковедение) というものがあつた。白いハードカバーの厚冊で、一九九二年から年刊として一〇冊が刊行された。發行元はペテルブルグ東洋學センター (С) (Центр «Петербургское востоковедение») となつてゐる。研究所のスタッフもしばしば寄稿してあり、研究所のアーカイブ資料の紹介もあるので、一定の關與はあつたものと推測される。ただペテルブルグ東洋學センターという組織にどれほど實體があつたのかは知らない。

東洋寫本研究所にはその他に、イスラム地域やチュルク學、モンゴル學といった個別分野の定期刊行物があるが、いまそれらを解説するだけの知識を持ち合わせない。當該分野の研究者にはすでによく知られていることであろうから、ここには敢えて取り上げない。

ここ数年、話に聞いていた新しい雑誌『東洋學者アーカイブ彙報』(Гуды Архива востоковедов ИВР РАН) の第1號(Выпуск 1)が最近ようやく出版された。特輯の題名は「Гуды востоковедов в годы блокады Ленинграда (1941-1944) (レニングラード包圍戰時期(1941-1944)の東洋學者たちの著作)」で、この困難な時期に執筆されたものの、公刊されることなくそのまま未刊稿としてアーカイブに眠っていた論攷十數編が解説付きで掲載されている。著者たちの多くはこの戦争の犠牲となった人々である。

東洋寫本研究所には東洋學者アーカイブが備わっていて、この研究所に在籍した學者たちの稿本や文書がきわめて網羅的に保存されていることが知られていた<sup>(1)</sup>。アカデミーの會員であった場合は、アカデミーのアーカイブに移管されることになっているために、オルデンブルグやラードロフといった人々の文書はここにはないが、それ以外の學者たちの研究ノットや往復書簡などは驚くほど豊富である。アーカイブ資料を用いた研究史についてはロシアの學界は極めて熱心で、これまでも『東洋の文獻遺産』や『ムテルブルグ東方學通報』などでしばしば眼にすることが出来たが、そういったものは今後この新雑誌で重點的に取り上げられることになるのである。今後の發展を期待したい。

注

(1) 一九一七年の革命以前におけるロシアのアジア研究全般については、今なおバルトリドによる『東洋研究史』が最良の参考書である。В. В. Бартольд. История изучения Востока в Европе и России: лекции читанные в университете и в Ленинградском институте живых восточных языков. Изд. 2-е, Ленинград, 1925. (著作集 Сочинения, т. IX, 1976. Москва, стр. 199-484 に再録。)「邦譯」ウエ・バルトリド著『歐洲殊に露西亞に於ける東洋研究史』、外務省調査部譯、一九三七年同部刊行。一九三九年、東京・生活社再版。他にドイツ語譯、フランス語譯が存在する。

(2) ちなみに中國語では東方寫本研究所とも東方文獻研究所とも稱されるが、後者が正式名稱である。URLは <http://www.orientalstudies.ru/>

(3) *Mélanges asiatiques* の題名に續けて“très du Bulletin historico-philologique de l'Académie Impériale des sciences de St-Petersbourg”と注記されているように、この雑誌はアカデミーの歴史言語部門のイズベスチヤ(Известия, Bulletin) から東洋學關係の論文を選録したものであった。

(4) 一九五〇年から一九五六年までは東洋學研究所の東洋寫本部(Сектор восточных рукописей)として、また一九五六年以降は東洋學研究所レニングラード分所(Ленинградское отделение)として位置づけられた。

(5) 『東洋の文獻遺産』誌創刊號の前言に見える表現。

(6) この研究所に所藏される寫本コレクション形成の歴史的経緯については、日本語で讀めるものとしてI・F・ポボワ

「ロシア科学アカデミー東洋學研究所サント・ペテルブルク支部の東洋寫本コレクション」『東京大學史料編纂所研究紀要』第一八號(二〇〇八年三月)が要領を得ている。

(7) ここには筆者が個人的に存じ上げている方々を主として、バランスをあまり深く考えることなく列挙したために、當然挙げるべくして漏れている方々も多く、バランスを缺いている可能性は大きい。失禮の段は前もってお断りしておきたい。

(8) <http://www.orientalstudies.ru/>

(9) クンストカメラ (Кунсткамера) は、創設者ピョートル大帝の名を冠するロシア科学アカデミー傘下の民族學博物館 (Музей антропологии и этнографии им. Петра Великого, РАН) である。

(10) この名稱、英文は St. Petersburg Centre for Oriental Studies、中國文では聖彼得堡東方學中心となっている。編集はマリモフ (M. A. Alimov) 氏が、編集部所在地はクンストカメラになっている。

(11) 藤枝晃「レニングラードの東洋學アルヒーフ」『圖書』第一九七號(一九六六年一月) 37-40頁。

既刊

## ACTA ASIATICA

### No. 55: Viewpoints on T'ang China (Translated by P. A. Herbert)

(中國唐代史：責任編集 池田溫)

1988年11月刊行總146頁  
定價4,200圓(會員1割引)

IKEDA On: Foreword

OTAGI Hajime: Eastern Wei Bridge Eastern Wei Bridge Granary during the T'ang Period

TONAMI Mamoru: Policy towards the Buddhist Church in the Reign of T'ang Hsüan-tsung

HORI Toshikazu: Social Change in Tun-huang from the Latter Half of the T'ang Dynasty

KANEKO Shūichi: T'ang International Relations and Diplomatic Correspondence

IKEDA On: A Review of T'ang Studies in Japan in Recent Years

### No. 78: Tun-huang and Turfan Studies

(敦煌・吐魯番研究：責任編集 池田溫)

2000年3月刊行總152頁  
定價4,200圓(會員1割引)

IKEDA On: Foreword

DONOHASHI Akio: A Tentative Inquiry into the Early Caves of the Mo-kaio Grottoes at Tun-huang: Questions regarding the Caves from the Sui Dynasty

MORIYASU Takao: The Sha-chou Uighurs and the West Uighur Kingdom

TAKATA Tokio: Multilingualism in Tun-huang

YOSHIDA Yutaka: First Fruits of Ryūoku-Berlin Joint Project on the Turfan Iranian Manuscripts

IKEDA On: Recent Japanese Research on Tun-huang and Turfan